

セコから学ぶ 障害のある子どものアリティ



日本福祉大学
伊藤修毅

いとう なおき／日本福祉大学准教授。専門は障害児・者のセクシユアリティ教育、青年期教育。共著に『イラスト版発達に遅れるある子どもと学ぶ性のはなし—子どもとマスターする性のしくみ、いのちの大切さ』(合同出版)、『くらしの手帳』(全障研出版部)など。



第5回 マスターべーション

(株)TENGAがおこなった「マスターべーション世界調査^①」によると、日本人男性の96%、女性の58%がマスターべーションを経験しているそうです。しかし、学校でマスターべーションについて教わった人はわずか12%にとどまっており、これは調査対象の18カ国の中でもロシアと並んで最下位とのことです。自慰、オナニー、ひとりエッチなどさまざまな言葉があり、最近は「セルフ・プレイヤー」を推す声も強いですが、ここでは、「マスターべーション」に統一して話を進めます。

ないなど、問題になることはあります。が、それは適切な場所や方法を教えていないということであって、マスターべーションそのものの問題ではありません。むしろ、きちんとマスターべーションができることは性的自立の第一歩であり、きちんとマスターべーションができる力を養うことはセクシユアリティ教育の第一歩と言われます。では、なぜ、ここまでマスターべーションを重視すべきなのかを考えていきましょう。

マスターべーションの役割

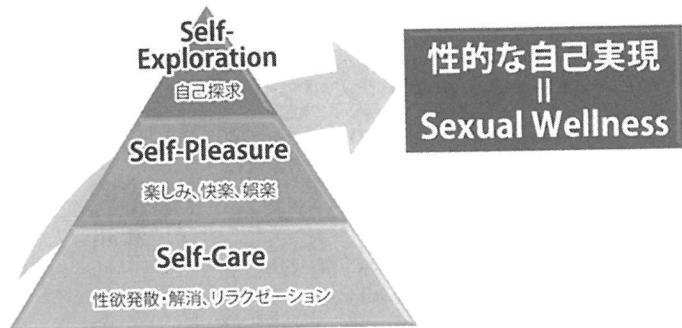
日本福祉大学の木全和巳さんは、マスターべーションの役割を、①セルフ・プレイヤー（自己娯楽）、②セルフ・コントロール（自己制御）、③セルフ・ディスカバリー（自己発見）、④セルフ・プライバシー（自己秘密）の4点に整理しました。マスターべーションは、①自分のからだを自分で使って楽しむ行為で、②性欲を含む自己コントロールの力を身につけることができるという役割があります。また、マスターべーションの際には性的なファンタジーを利用するので、③自己的な好みや傾向を知る自己発

見の役割もあり、同時に、④「ひとりになる力」「秘密をもつ力」を身に付ける契機にもなるということです。

障害のある子のマスターべーションを強く禁止する保護者・支援者は少なくありません。マスターべーション禁止の環境で育ったAさんは、かなりのストレスをため込み、さまざまにしがなさを「問題行動」で表現していましたが、ショートステイを利用して、ショートステイ先ではマスターべーションOKとしたところ、その「問題行動」のほとんどが消失しました。Bさんは、強度行動障害と言われる状態にまで至ったそうですが、ケアホームに入り、個室が保障され、マスターべーションができる環境に置かれたら、パタリと行動障害がおさまったそうです。

こういった事例を聞くたびに、マスターべーションが、いかに「偉大」な行為であるかに気づかされます。本誌で2015年から3年間連載されていたおがわ・フランソワさんの漫画は、15歳のしようちゃんが布団の中でごそごそとマスターべーションをしているシーンから始まりました。この時、「ごめん、邪魔して…」とそっと布団を掛けてあげたお母さんの対応^③はステキでしたね。

図 マスターべーションの3つの段階を通じてセクシアルウェルネスへ



性的な自己実現への道

冒頭で紹介した調査を実施した(株)TENGAは、「世界中の人々の性生活を豊かにし、人を幸せにする」をミッションとしています。そのなかで「性にまつわる悩みや問題を解決することを目的に生まれた」TENGAヘルスケアという会

本連載の第1回目で1999年に世界性科学会議が採抲した「性の権利宣言」を紹介しましたが、ここに「(性の権利は)私たちが自分自身の身体をコントロールし、楽しむ権利をも意味する」とあります。つまり、マスターべーションをすることは、私たちの大切な「権利」であるということです。しかし、いまだに、マスターべーションを「問題行動」ととらえている人も少なくありません。人前でしてしまう、うまく後始末ができ

マスターべーションの権利